

所属・資格 社会学科・教授

申請者氏名 久保田 裕之

研究課題		コロナ下における世田谷区ホームシェア事業の聞き取り調査
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>コロナ下での疫学的な隔離と社会的孤立を巡り、改めて共同生活が議論となっている。というのも、同居家族は、対内的には相互にとって感染リスクであると同時に、対外的には感染「リスクを共同するもの」として隔離や社会的距離の対象とはみなされなかった。</p> <p>では、同居しながらもこうした「リスクを共同するもの」とはみなされにくい、家族以外の他人との共同生活において、防疫上のリスクはどのように受け止められているだろうか。他人との共同生活の中でも、高リスクと考えられる高齢者と低リスクと考えられる若者の共同生活であるホームシェア事業についての聞き取り調査を行い、コロナ下での共同生活と防疫の関係について明らかにした。</p>
	研究の結果	<p>少ないサンプルではあるが、2ペア4名の聞き取り調査から、家族ではないものの物理的接近性から高い感染リスクを抱える共同生活者は、一方で、家族と同様に隔離生活を強いられる中でも「ある程度の対策をしたら感染しても／感染されても仕方ないもの」というリスク共同体として認識されるものの、他方で、リスクを共同すべきとされる家族を外部にも持つため別居家族から共同生活者が「排除可能なリスク要因」と見なされるという二面性を持つことが明らかになった。具体的には、同居している当人同士は、隔離生活中に「本当に一人だったら逆に参っていた」「ある程度対策をしたらあとは運次第」といった点で、リスク共同体を肯定的に評価しているものの、別居家族（高齢者にとっての別居子／若者にとっての別居親）にとっては「感染されたら大変／感染してしまったら責任問題」といった点で、むしろ自らに飛び火する可能性のあるリスクを忌避することで、高齢者の孤立を後押ししてしまうケースがあった。</p>
	研究の考察・反省	<p>当初は、世田谷区のNPOを通じて3ペア程度を調査対象とする予定であったが、世田谷のNPOでは年度初めに1ペアを残して終了してしまったため、練馬区のNPOから1ペアの、計2ペア4名への聞き取り調査にとどまった。結果的に少ない調査から示唆されたように、高齢者と若者の共同生活のリスクが周囲からどのように受け止められているかについて、やや楽観視していた点は反省が残る。また、5月にダブリン（アイルランド）で予定されていたホームシェア世界会議は、4月前に無期限延期が決まり、もともと国際学会のために確保していた予算は、10月にエラスムス関連の協定を結んでいるマリボル大学（スロベニア）へ出張に切り替え、講演および研究会での研究交流を行った。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日／場所	学会が中止になったため、発表は該当なし	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	年度内の研究成果なし	